
恋の始まりは突然に

やくちゅう乙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋の始まりは突然に

【Nコード】

N7430P

【作者名】

やくちゆうこ

【あらすじ】

女の子が嫌いでしょうがないでいる霧谷 麗は、ある日お金持ちのお嬢様

姫咲 華恋に出会い、ひょんなことから一緒に生活することになる。「俺は女が嫌いなんだ!」「私が直してみせるわよ!」麗はいやいやながらも華恋に振り回されてしまう。しかも麗は次々と女の子と絡んでしまう羽目に…

「どうしてこうなった!」全力で逃げたい日々に麗は耐えられのか!?

そしてなぜ麗は女嫌いなのか？
シリアスかつ青春ラブコメディが今ここに誕生！

はじめに（前書き）

初めまして。

作者です。

あまり難しいことは抜きにして書きたいと思います。

誤字脱字は皆様の広い心で許してください。

楽しく書けたらと思います！

どうぞよろしくお願いします！

始めに

始めに言っておこう、俺は女という生き物が嫌いだ。

いきなりすぎて申し訳ない。

だからこれから始まるこの物語を、どうか女性の皆さんには気を悪くしないで読んで貰いたい。

そもそもなぜ俺が女を嫌いなのか？

これに疑問を抱く人も多いであろう。

なぜかって？

それは世の中の男は皆、女が好きだから。

勿論、俺は同性愛を否定するつもりはないが、俺は断じて違っ！（昔本気でホモだと思われてた）

本当に、女が嫌いなだけなんだ。

そこは理解しがたいと思うが、どうか皆さんの心の広さで許してほしい。

おっと、前置きが長かったな。

俺の名前は霧谷麗

この時代にありそうな、いかにもな名前である。

さて、今この状況を説明するとしよう。

今俺の家には、まるで自分の家かのようにくつろぐ女が一人。

なぜ俺の家に居るのはある事情によるものだ…

今でも信じられないが…いや信じたくもないんだけどね…

さて、そろそろ事の始まりについて話すとしよう。

話は、一か月前に遡る。

始まりは突然に

ジリジリジリ！！！

目覚ましのごつい音で目が覚める俺。

「ふわぁー。朝か…」

重たい体を起こしてベットから降りる俺。

窓を開け、朝の清々しい空気を吸いながら思いっきり欠伸をする。

「朝メシどうすっかなあ…」

と、つぶやきながら学校の用意をする。

ちなみに俺は一人暮らしで、今はアパートを借りて生活している。

両親とは分け合って一緒には生活はしていないのだ。

「はあ…」

俺のため息は重い、なぜなら俺は学校に行くからだ。

学校に行きたくないーなんていつてる癖に、着いた途端に楽しそうにするのはリア充としか言いようがない。

まあなぜ学校に行きたくないかといえば、女が嫌いだからだ。

女つてのは面倒な生き物だ…

そんなことを思って支度をしているといつの間にか学校に間に合わない時間に。

「つやべ！」

大急ぎで支度を済ませて、家を出る。

「ハア…ハア…」

仕方がないので走って学校へ向かう。

ちなみに、なぜ男子校に行かないかといえば、この近辺にないからである。

一番近い所で、片道2時間、人間面倒なことは嫌いな訳で…

「ハア…昨日遅くまでゲームやるんじゃないかった！」

そんなことを口に出していたら、俺の横を高そうなりムジンが通りすぎるではないか。

「いいよなー。金持ちは…」

そんなことを走りながら言っていたら、なんとリムジンが止まった。

「ん？」

さすがに走る足を止める、何事だ？

ガチャ

高そうなリムジンから一人の女の子がでできたではないか。

「ありがとう、サラ。」

彼女はそう言いながらこちらに近付いてくる。

さすがに焦る、俺なんかしたのかな。

「なっ、なにか？」

勿論早くこの場から立ち去りたいために早口になる。

すると彼女は一言。

「会いたかったわ、麗！」

「はい!？」

俺は耳を疑った。

「はい?じゃないわよ!久しぶりって言うてるの!」

「いや...その...急いでるんで!」

この場の空気に耐えられず、そのまま走る。

「あっ!ちょっと!待ちなさいよ!」

全く、朝から女の子と話すなんて全く……不幸だ……

始まりは突然に2

キーンコーンカーンコーン

「おい！早くしろー！遅刻だぞー！」

やっとの思いで学校の門に辿りつくと、先生らしき人物が生徒たちを急かしている。

「ハア…ハア…」

「おい！君も遅刻になるぞ！早くしたほうがいい！」

「ハア…はい…」

疲れているせいで声が出ない、朝から本当についてない。

キーンコーンカーンコーン

「終わった…」

その瞬間、霧谷 麗の遅刻が確定した。

もう遅刻なのは確定しているので、ゆっくりと教室へ向かう。

「今日占い一位だったのになあ…」

落ち込みつつも教室へ到着する。

ちなみにこの学校は「私立しりつ 城彩学院じょうさいがくいん」

校舎内は白を基調としており、形は字の如くまさに海外の城、あのデズニールランドのお城に近いものを感じる。

校舎は四階建てで、下から一年、二年、三年というシンプルな構造。

「先生来てるかなあ…」

ちなみもう一つ付け加えると、今日から新学期。

俺が二年生になって初めての学校になる

「新学期そうそう遅刻かあ…」

そんなこんなで無事に教室に着く。

中ではすでに出席を取っているようだ。

「前崎ー、岡島ー、原中ー」

このタイミングで入るのかよ…

俺は意を決してドアを開ける。

ガラガラ

教室に十分響く音により、皆の視線が一斉に俺に向けられる。

「霧谷ー。新学期から遅刻とはいいい度胸だなあ」

先生がニヤニヤしながら俺に話しかける。

ちなみに、この先生は「如月 真由美」
この城彩学院に通う女の先生だ、歳は24、スタイルは抜群、髪は黒のロングで顔も整っていると思う、おそらく世間一般でいういい女だ。

故にこの学校の男子からの人気が凄まじい。

「いや、変な人に絡まれてしまって…」

まあ当然こんな理由が通るはずもなく

「後で職員室ね」

100%笑顔でお呼び出しだ…死にたい…(切実に)

「じゃあ霧谷だけ自己紹介してないからさっさとお願いい。」

「はい…」

あっさりと自己紹介をさせられる。

「霧谷 麗です。趣味は、えー…料理？です…宜しくお願いします…」

パチパチ

愛想だけの拍手がさらに恥ずかしい。

「じゃあお前は今日転校してきた姫咲の隣なー。」

「はい。」

指定された席へ向かう。

パツと見顔は見えなかったけど、女なのは確かだった。

でも俺はさらに驚愕する。

まさか、席の隣が…

「麗！隣になれてよかったわね！」

そこには今日、会ったばかりの女が、俺の席と思われる隣に座っていた。

始まりは突然に3

「なっ…なんでここにいるんだ?…」

「なんでって、転校してきたからに決まってるじゃない!」

「いやー…マジ…えっ?」

あまりにも驚きすぎて焦る、それはそうだ、今朝あつたばかりの人が突然隣にいれば誰だってビックリするに決まってる。

「ん?なんだ霧谷、知り合いなのか?」

先生が唐突に聞いてくる。

「いや…その…」

知り合いつていうか、顔見知り?

そんなことを思っていたらHRの終了の時間になった。

キンコンカーンコン

「よし!じゃあ朝のHRは終わりだ!。霧谷は放課後に職員室に来いよー、じゃあ皆がんばってな!。」

ガラガラ

先生は足早に教室を出て行ってしまった。

放課後で…これは男子からの嫉妬が凄そうだなあ…はあ…

しかし今問題なのはそんなことではなく。

「ねー麗！今までどこにいたのよ？アンタがどっか行くからアタシつまんなかったのよ？」

まるで昔の友達に会ったかのように、今朝あつたばかりの人が話かけてきた。

「はあ…」

「何よ？」

しばし嘆息しながらも聞きたいことを聞いてみた。

「そもそも、なんでアンタは俺の名前を知っていて、俺が引っ越してきたことも知ってるんだよ？」

「ん？そんなの簡単よ！」

そうして目の前の女の子は答えた。

「だって一緒に遊んだことあるじゃない！アタシたち、それに居場所ならすぐに家の人が捜してくれるし。」

「……えっ？」

「忘れちゃったの？アタシのこと守るって言ったくせに！さんざん

その気にさせたくせに。」

「……………」

なんだコレ、イジメ？ドッキリ？カメラでもあるの？

だいたい俺は女の幼馴染なんてのはい…いないし、そもそも会った記憶もない。

一人で混乱していると見かねた同じクラスの友人が話かけてきた。

「よう麗、朝からどうかしたのか？」

「ああ、荒ちゃん…」

この朝から爽やかに話しかけてきたのは俺の親友の「並木 荒生」
成績優秀でスポーツ万能、おまけに顔もカッコいいという完璧人間。
その長すぎず短すぎない金髪が特徴だ。

ちなみ俺は荒生だから荒ちゃんと呼んでいる。

「いや実は…ちょっと俺も訳わかんなくてさ…」

俺は荒ちゃんに事情を説明した。

「なるほど、確かに訳がわからん。」

荒ちゃんは苦笑いしつつ答える。

「麗、この人は？」

慣れ慣れしく今朝あつた人が聞いてくる。

「アンタなあ…」

キーンコーンカーンコーン

そんなやり取りをしていると授業開始の鐘が鳴りだす。

「とにかく、この話は昼休みにでも三人でしよう、麗も大分困ってるみたいだし。」

「助かる…」

持つべきものは友達である。

「いいわよ！認めないならーから説明してやるわよ！」

こうして俺は、知らない人と荒ちゃんと昼飯を取るようになった。

始まりは突然に4

「はい、ココテスト出るよー。」

「はあ…。」

先生の授業も耳に入らないまま、俺は疲れきっていた。

隣にいる奴に目を向けてみれば、なぜか満面の笑み…ハハハ…

いや実に笑えなかった。

「はい、じゃあ授業終わりネ。」

数学の先生があっさりと告げ、一限目が終わる。

この後の授業もこんな感じで、授業の終わりにはなるべく話さないようにトイレに行ったり、適当に時間を潰したりしていた。

キンコーンカーンコーン

「やっと4時間目終わりだな、じゃあ麗と姫咲さん、メシ食いに行こうか。」

昼休み前の授業が終わると、荒ちゃんが俺たちに話しかけてきた。

「あーお腹すいた!」

「…。」

この状況でよく腹減ったとか言えるな…

ともかく俺たちは食堂へと向かう。

ちなみにこの学校には食堂があり、生徒たちは値段が安いこともありここで食べることが多い。

「とりあえず何食う?」

荒ちゃんが注文を取ってきてくれるらしい、俺は生憎食欲がないためパス

「私はパスタ!」

さいですか…

「じゃあ注文してくる。」

荒ちゃんがいない間、しばしの沈黙はあったが今朝…面倒だから「Kさん」にしよう。

Kさんはそれでもずっと俺の顔を見ていた気がする。

「お待たせー。」

荒ちゃんが料理を運んで帰ってきた。

「じゃあ二人とも、始めようか。」

「ああ…」

「ええ！」

意気込みこそ違うものの、シンクロしてしまった。

とりあえず、聞いてやる！

「まず俺はアンタとどこで会った？それとその気にさせたってなんだ？」

すると突然Kさんは強張った表情になり、怒り出した。

「あのさ！さつきから「アンタ」ってのやめてよ！私には姫咲ひめさき華か恋れんつていう名前があるんだけど！」

「えっ、ああ…すみません…」

「うわこえー」。

「まあまあ、姫咲さん落ち着いて。」

荒ちゃんが仕切りなおし、話し合い続行。

「じゃあまずお互いの自己紹介！は済んでるからー、とりあえず姫咲さんがさつきの質問に答えて。」

荒ちゃんが進行してくれたおかげで何とかなりそうだが、しかし俺の質問の答えがとんでもないものだった。

「いいわよ！まず出会ったのは公園で、その気にさせたってのは将来結婚してくれるってこと！」

そう思っていました、本当に…

「だーからー！なんでアンタって呼ぶのよ！名前があるんだから名前前で呼んで！わかった!？」

「…」

神様…俺…何かしたんでしょ…俺…悪い子なんですか…

しばしの沈黙のうち、姫咲がさらに恐ろしいことを言ってきた。が…

「あっ！そうそう、今日から麗の家に住むから／＼／＼あっベッドは一つだから麗と一緒にいるけど私はBerry」

「おいおい麗…お前…」

荒ちゃんの顔が引きつっていた、俺はここで認めたら負けだと思いき、全力で抵抗する！

そう、働いたら負けの精神である！頑張れ！俺！

「ああ…お前の言いたいことは分かった…だが家の主は俺だ！結婚の話も時効だろほとんど！それに俺はお前が嫌いだ！」

ああ、やっと言いたいこと言えた…これでさすがに嫌いになるだろ…さあどう出る!？」

「家のことはウチの会社が不動産ごと買って解決、結婚の話はまだ10年も経ってないから大丈夫、私は麗が大好きよ？」

キンコーンカーンコーン

俺の人生…終わった…

始まりは突然に6

「はあ…」

さて、所変わって今は午後の授業中、しかし俺は授業が全く耳に入らない…

それもそうだ…まさか…一番楽しい昼の時間が地獄と化してしまうなんて…

「じゃあここ、前崎さんわかる？」

「えーつと…ごめんなさいわかりません。」

「じゃあ、皆これテスト出すからね！」

「「ええー!!」」

ふん、なにが「ええー!!」だよ…絶望してんのは俺の方だよ、畜生…

「はあ…」

俺はさっきからため息しか出ない…

どうやらさっきの話を少し整理すると、実は姫咲さんと俺は一応許嫁だったらしい、家系がどうだとか、初耳だよ…

そして俺は覚えてないがまさかのプロポーズ…

さらに家に転がり込んでくる…

入れないのも考えたが主導権は向こう…つまりそついう事だ…

キーンコーンカーンコーン

「じゃあHR終わりな、皆気をつけるよー。」

気づいたら如月先生が教室に居てHRが終わってしまったた。

「霧谷ー、渡すもんあるから職員室付いてこーい。」

如月先生が先に教室を出て行った。

「はい、今行きます…。」

とりあえず返事をし、荷物を纏める。

「麗ー！また後でねー！」

姫咲さんは満面の笑みで帰ってった、おそらく身支度をしに…はあ…

「なあ麗…まあ…俺からは何も言えないが…頑張れ！」

荒ちゃんを初めて頼りないと思った。

「いや…気にすんなって…じゃあな。」

ガラガラ

俺はそう言って教室を後にする。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7430p/>

恋の始まりは突然に

2011年9月5日16時50分発行